

●水稲グループでは、毎年60種以上の交配と数十万株の栽培を行っています。多品種を少量ずつ栽培するため機械化できず、田植えから稲刈りまでのほとんどを手作業で行っているそうです。



この春から上川農業試験場に異動した宗形さんは、現在、主に管理業務を担当しています。圃場に出る機会が減り「さびしい」と本音を漏らしますが、研究の方向性を見定め、品種改良チームをまとめることも大切な仕事だといいます。

**10年先を想定しながら
持続可能な農業を支えていく**

研究も必要になってきました。宗形さんは、「反収を上げることで収量を確保しながら農作業の負担軽減を図り、生産者の収益を守ることが重要になる」と話します。

農業の担い手不足が課題になるなか、大きな関心を集めているのが直播米です。今年から、上川農業試験場が開発した直播品種「えみまる」の本格栽培が始まりました。「えみまる」は低温苗立ち性に優れ、病気にも強いという特性を持っています。「直播栽培をやってみたいという若い生産者が増えていて、気運も高まっています。新しいお米として浸透してくれば」と宗形さんは期待を寄せます。

種を直接水田にまく直播米は労力が軽減できる一方、北海道では5月から9月の間に播種から収穫までを済ませなければならず、上手に育てるにはコツがいるそうです。そのため、各地域の協議会や研究会が中心となって技術を伝達し、普及を後押ししています。



●10月初めの圃場では稲の刈り取りが終盤にさしかかっていました。



●刈り取った稲は種類ごとに分け、昔ながらのはぎ掛けにして干していきます。



●この水田では冷たい水を流し続けることで寒冷な条件をつくり、寒さに強い稲を選抜しています。



●上川農業試験場ではドローン技術の新たな応用方法など、外部の企業とも連携しながら農作業の省力化と効率化を図る研究にも取り組んでいます。

ここ数年、食味の良さが注目され、高い人気を集めるようになった北海道米。「収量は多いが味は良くない」という北海道米の評価を一変させた「きらら397」をはじめ、「ほしのゆめ」や「ゆめぴりか」といったブランド米を生み出してきたのが上川農業試験場です。

水稲グループの研究主幹を務める宗形さんも、大学の農学部で生産技術分野を学び、卒業後も研究に携わりたいという思いから北海道立農業試験場に入職しました。「じつくりと研究をしながら農業を支えていく役割が自分に向いていると思いました」と話す宗形さん

**交配と選抜を何年も繰り返して
優れた品種が生み出される**

「比布町」
北海道立総合研究機構
上川農業試験場
研究部 水稲グループ
研究主幹
宗形 信也 さん



●宗形さんは30年にわたり、主に水稲の品種改良に従事してきました。「北海道農業を支えてきた技術と精神を次代に伝え、伝統を引き継ぐことも私の大切な役割だと思っています」

●新たな水稲品種の開発で北海道農業を支える

これからは味の良さだけでなく、農業を維持する視点も必要な時代。直播品種や多収品種の開発で、北海道農業を未来へと引き継ぐ。

んは、最初の配属地だった道南農業試験場で、記録的な冷害という試験に直面しました。「1993年に起きた大冷害では、育種用に栽培していた稲が育たず、種も取れませんでした。そこで仕方なく翌年、新たにもらった種の中からできたのが『あつくりんこ』だったのです。もしもあの冷害がなかったら、『あつくりんこ』は生まれていなかったかもしれません。

その後、中央農業試験場の岩見沢試験地や滝川遺伝資源部、長沼の本場に勤務するなかで、「ななつほし」の品種認定に向けた最終チェックや耐冷性の高い酒米「彗星」の品種改良などを経験。北海道米の品質の維持・向上にも取り組み、農業の底上げに貢献してきました。

品種改良は交配から始めて種を増や

**省力化と効率化による
農家の負担軽減もテーマに**

「きらら397」が生まれた88年以降、北海道では主に味の良さを目的とした品種改良が続けられてきました。しかし離農する農家が増えたことで、需要に見合った米の量を安定生産するための



●収穫した米は冬の間、食味試験などさまざまなテストを行い、優良な品種を選抜していきます。